

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ニコス・カザンザキス 「日本中国旅行記」より
Author(s)	藤下, 幸子
Citation	プロピレア , 24 : 124 - 141
Issue Date	2018-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046852
Right	Copyright (c) 2018 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



ニコス・カザンザキス

「日本中国旅行記」一より

藤下 幸子 訳

現代ギリシア語教室エリニカ講師

神戸

神戸に入港したのは、朝だった。春らしい薄雲が空を覆っていた。空気は湿っぽく、煙の臭いがしていた。

木造の低い家の隣に、いきなり高層ビルが建っていて、とてつもなく大きな日本語の看板と旗を掲げている。波止場から山のふもとまで、至るところで高い煙突が煙を吐いている。

私の中で二つの声が出ている「なんてまあ、汚いんだ。春の空気が煙でひどく汚染されている。西洋文明の疫病が、この国のゲイシャたちの穢れのない笑顔にまで広がっているなんて。聖なる鳥、すなわち人の心が止まって

囀るような、花盛りの枝は、この世界にはもう残らないだろう」

もう一つの声は、無情でからかうようだ「泣き言は止せ、避けがたいことと戦って、もの笑いになるようなことはやめろ。おまえの前にある新しい現実の、厳しくて直線的な美しさを見付けるように努力をしろ。もし、おまえが奴隷状態のこの世界で自由でいたいなら、必要なことを自分の望みとしろ」

霧雨が降り始めた。空が暗くなって、薫製の雨よけマントを着た日本人労働者で、汽船は一杯になった。彼らは静かで、一言も発せずに働いていた。無駄な動きもせず、すばやく荷物を降ろしていた。背が低く、日焼けして逞しく、すばしっこく、活き活きとした目をしている。《いつの日か黄色いこのクーリー（肉体労働者）がパリやロンドン、ニューヨークさえも、すばやく空っぽにしかねない勢いだ！》と私は考えた。

中央のアメリカ街を急いで離れ、閑静な路地に入った。ホッとした。色々な紙のランプ（提灯）がそれぞれのお店にぶら下がっていて、それは、異国的な提灯行列のようで、その色とりどりの灯りの中で、どの人の顔にも微笑が浮かび輝いていた。歩道は、商品でびっしりと飾

りたてられていた。おもちゃ、果物、着物、下駄、お菓子類、ゆで卵、瓜の種、ピーナツ……。脇の小道に、花の咲いた木があり、その後ろに小さな木造の古びた神社があった。神社の前には線香が焚かれていた。大きな石が真っ直ぐ建っていて、次の言葉が深く彫られていた。

《ああ、忠実なクズノキ（楠正成）がここに横たわっている》^三

雨が強まった。花の咲いている木の下で、一瞬、私は立ち止まった。物乞い女が一人、双子の赤ん坊を肩掛けに包んで背負っていた。三人はしつかりと一つになって、哀れなボロの三位一体であった。その女は祭壇の入り口に立って、片手を差し出した。もう一方の手で、赤ん坊が濡れないように、破れた紙の傘をしつかり持っていた。私も片手を伸ばして、彼女のしなびた掌に小銭を置いた。

物乞い女は微笑んだ。

「アメリカ？」と私に訊いた。

「いいえ、キリヒャー（ギリシヤ）」

彼女は吊り上がった目を開けて、私を見た。「キリヒャー？」そんな場所がこの世にあるなんて、初めて聞いたようだ。小さな神社の扉にぶら下がっている大きな赤い提灯の灯りの下で、私も彼女を見つめた。彫りの浅い顔

を見た。口の周りの悲し気な皺、虫歯の出っ歯。

（アデルフィー^四）を日本語でどう言うか知っていたらなあ。そうしたら、やさしい一言で、彼女を慰めてやれたのに。彼女の神であるブツダは、《お金による施しは、人を七年養うことができるが、やさしい言葉は、七十七年養うことができる》とよく言っていた。

雨脚が強まった。今や篠突く雨となり、赤い提灯に打ちつけていた。墓石がびっしり濡れて光っていた。物乞いは私の頭に傘を差し出し、私は傍に寄った。ボロの紙の屋根の下で四人ともぎゆうぎゆうになって、雨が止んで別れる時を待っていた。赤ん坊と物乞いと私は、（忠臣クズノキ）の墓の前で、そんな風に長い間、口も利かず、動きもせず、幸せな気持ちで、雨に濡れた大地の匂いを吸っていた。

明け方に起床した。日本の町がどんな風に目覚めるのか、見たくてたまらなかった。雨あがりの澄んだ空気。聖なる山、マヤ・サン^五（摩耶山）は、くすんだ薔薇色に輝いて、山の中腹には豪華な真っ白な別荘があちこちに建っていた。

どの店も既に開いていた。日本人たちは早寝早起きで、

太陽のリズムに従っている。長い時間、大きな音を立てて顔を洗う。強烈に嫌なにおいのする濃い汁を飲み、いろいろな漬物と井飯を食べる。女性はひざまずいて夫に仕える。いろいろな木の器に入れた食べ物を盆に載せて夫に持ってくる。着替えるのを手伝い、靴を磨いて紐を結んでやる。玄関の戸を開け、黙って深くお辞儀をする。ここでは、夫は威張るようでもなく、ぶっきらぼうでもなく、妻の崇拜を受け入れている。妻は夫を敬っているが卑屈さはない。神を手懐けて一緒に寝る巫女のようにある。

町は目覚める。下駄の音が聞こえる。農家の娘が長くて太い竹竿を肩に載せてやって来る。きれいに編まれた籠に入れた野菜や果物を竹竿の両端にぶら下げている。大衆食堂が開く。鉢巻をした料理人が立って待っている。店の暖簾がだんだん明るく照らされて、描かれたドラゴンが目覚める。分厚い板の看板の上のもつれた文字が、はつきりとしてくる。

小さな寺では、まだ提灯に火が点っていた。何の飾りもない粗末な小さな建物、奥には木彫りのブツダがあるだけ。入り口の前に桶（賽銭箱）があり、信者たちが小銭を投げ入れる。私は立ち止まって、愛すべき指導者で

あるブツダを見つめる。薄明りの中でアーモンド型の目を伏せて、からかうように皮肉っぽく、静かに微笑んでいる。大きな耳で、地上の全ての虚しい物音を聞いている。通りすがりの肉体労働者や商人や女性たちが、時々賽銭箱に小銭を投げ入れる音も聞いている。いつの日にか、灰のように厚く世界を覆うであろう大いなる静けさも聞く。信者は一瞬立ち止まって、三度手を叩く。神に呼びかけ、神が現れて、自分の言うことを聞いてくれることを望むかのように。深い賽銭箱に小銭を投げ入れ、しっかりと手を合わせ、神に祈る。仕事が上手く行きますように、ブツダが手を貸して助けてくれますようにと。そしてブツダは、涼しげな影の中で、皮肉っぽく微笑んでいる。私もブツダに微笑みかける。まるで、古代ローマの占い師たちが、人けの無い小道でばったりと出会った時のように。そして、私は散歩を続けた。

工場のサイレンが甲高く鳴り始めた。粗末で派手な着物を着た女工の団が、微笑みながら急いで通り過ぎる。一瞬私を見つめ、笑い始める。私も嬉しくなると、彼女たちに声をかける。

「オハイオ、コザイマス！ お早うございます！」
すると、大勢の娘たちが、とても爽やかに「オハイオ、

「コザイマス！」と私の声に応える。

七輪に火が入り、歩道には屋台が据えられる。八百屋がバナナや林檎や梨を広げている。太い竹竿を肩に担いだ荷運び人たちが通り過ぎ、港へ降りて行く。友達が出会おうと、挨拶が始まる。膝の上に掌を広げて置き、深く長々と三度お辞儀をする。お互い身を屈めたまま顔を向け合い、相手の健康を尋ね、出会えた喜びを語る。

世界でこれ程礼儀正しい民族はいないと、私は思う。全ての礼儀正しい振る舞いは、ここでは高度に様式化されている。よく知られている日本人の微笑みは、お面であるのかもしれない。しかし、このお面は共同生活をより楽しいものにし、人々の関係に礼節と気品を与える。従順で自制すること、全ての苦痛を自分自身のものとする、自分自身の不幸で、他の人々に迷惑を掛けないようにすることを教える。こうして次第にお面は顔になり、恐らくは単に形であったものが、本質となる。

日本人の侍であるカツ・カイスー（勝海舟）は、いくつかの言葉で、人間のこの難しい理想を明確に表現している。

《他人の前では微笑んでおれ

自分に對しては厳しくあれ

老急の時には勇敢であれ

日常生活では朗らかであれ

人々がお前に拍手喝采する時は冷静であれ

ヤジられた時は動じるな》^六

日の光が既に町に溢れ、陳列窓は輝いている。その頃は終わった。足は踊り疲れ、指は三味線を弾いて疲れた。やつと着物を脱いでホツとする。背中に結んだ絹の鞍のような帯を解く。香りのする着物を脱いで、薔薇水で顔を洗い、畳の上に布団を敷いて倒れ込む。シマダという面倒な髪の高層建造物が壊れないように、とても小さくて硬い枕に、うなじを注意深く凭せ掛ける。というのは、ゲイシャたちは魅力的な昔ながらの伝統に従って、着物を着て髪を結う。モガ^七へモダンガール^ルのように西洋の流行を追っかけて、髪を切ったりドレスを着て帽子を被ったりはしない。

「曲がった膝が見えないように！ 頭のでっぺんのハゲが見えないように！」モガたちは、クスクス笑いながら陰口をたたいている。本当にそうかもしれない。しかしゲイシャも日本のお面の一つであり、恐らくは、最も優しく最も眩惑的な日本の魅力の一つかもしれない。ゲイ

シヤが、あどけなく清らかな目で微笑みながら、しずしずと通りを歩いているのを見ると、心は癒される。なぜなら、挑発的で厚かましい目をした、恥知らずの白人の女たちを見飽きているので……

事務所が開いた。黄色い手が神経質に電話を掴む。綿花、砂糖、鉄、絹、化学製品、汽船。神戸が必要としているものが目覚める。満員のチンチン電車^ハが、鐘を鳴らし街を引き裂いて行く。小柄でかわいい女性の車掌さんたちがステップに立ち、口元に微笑みを絶えず浮かべ、切符を集め、一本調子のメタリックな声で「アリガト、コザイマス、アリガト、コザイマス」と乗客を見送る。

歩道は男女で溢れかえっている。どの女性も一人ずつ子供をしつかりと紐で背負っている。男も女も子供も赤ちゃんを背負っている。カンガル―人間は下駄を石畳に強く打ち付け、あちこち歩き廻っている。タカタカ、タカタカ！ ほら、日本の道の大きな声。

私も行ったり来たりして歩き廻りながら、任務を遂行している。私は素晴らしい風刺小説『吾輩は猫である』を書いた著名な日本人のユーモア作家、夏目漱石について考えている。一匹の猫が、人間たちから受けた日々の印象を語っている。漱石は、人生の高等遊民で、とても

賢く、洗練された東洋人であり、今日の熱気の中で、精神を冷静に穏やかに保っている。彼は言う「人生は楽しいことで一杯である。お茶の品質について話すこと。庭の花に水をやること。絵や彫刻やらを見て、あるいは、冗談を言ったりして、日がな一日ぶらぶらして過ごすこと。ほら、これが現生の遊びなんだ。一体どうして、これらの遊びが文学のテーマにならないことがあるのか。例えば、ある市民が市場に買い物に行く。ぶらぶらするのは確かだ。子供がお巡りさんにネズミを手渡すのを見ようと、交番の前に立ち止まる。ライオンみたいに威張った人が、友達にホラを吹いて自慢するのを注意深く聞こうと立ち止まる。ゆっくりと買い物をする。見たり聞いたりしたいなら、急いではいけない。もし急いでいたら、何も見ず、何も聞かず、まっすぐに買い物に行くだろう」

私もそんな風に散歩しながら、その日本人風刺作家の言葉を思い出して嬉しくなる。それに多忙な神戸の町の中にいても、私は少しも気が咎めない。何故なら世界中を旅しながら見聞きするのが私自身の買い物だから。

一、日々の務めを果たしながら穏やかに生きなさい

- 二、心を清らかに保ち、心の声に従って行動しなさい
- 三、祖先を敬いなさい。
- 四、帝の意思をあなた自身の意思としなさい、そしてそれを実行しなさい。

これらが、日本人の精神を支配している四つの主要な訓令である。日本人は、重要な形而上の問題は気に掛けない。日本人は、インド人のように個性を失くし^九宇宙の中に消滅すること^十は、受け入れない。世界はどこから来てどこへ行くのか、日本人は無関心である。果てしない精神の地平線は、日本人にとっては、曖昧で不毛に思える。日本人の視野は土と海、先祖の骨やら灰で一杯の祖国の狭い脱穀場に限られている。日本人にとっては、人間の最高で実りの多い本分は、狭い自分の民族の領域の中で働いて行動することである。

日本、これこそが、日本人にとっての全世界。それは、日本人を快く受け入れている。今にも跳び出そうとしているバネのように、神経質に密かに振動している小さな体全体、そして飽くことのない抑圧された心全体、それらは自分たちの民族の領域の中で活動しながら、全ての可能性が最高点に達するのを見出す。日本人は、心に信

念を持っている。なぜなら、心は鼓動している儂い一切れの肉でしかないような個人的な所有物ではない。心は民族全体のものである。日本人が正しい道を見つけ、自分たちの行動を規制するためには形而上の方法は必要でない。間違いない心の声、すなわち民族の声を聞いて、それぞれの行動を定める。この確実性、すなわちほとんど肉体的なこの確実性は日本人の活動を単純に素早く確かなものにしていく。

日本人は活動している時だけ、生きていると感じる。ナイチンゲールは囀る《始めに歌ありき》。そして日本人は言う《始めに行動ありき》と。石ころだらけのこの大地の上では、行動が救済の唯一の道であると信じている。職業の如何を問わず活動することによって幸せな生活を築き、民族を救済できることを日本人は知っている。個人と民族の利益は一致している。

明治大帝は、二世代前（七十年程前）に日本に再生をもたらし、公務の合間に、詩を書くことを習慣としていた。彼のこの三行の詩を日本人は誰でも祈りのように唱えていた《王であれ田舎者であれ、運命の女神がおまえをどこに置こうとも、自分を使い切れ》^{十一}

ある太った日本人の工場主は、蚊を殺すための粉を作っている工場中、私を今日の午後ずっと連れまわした後、爪先立って、狂信的に得意げに私に話した。彼の工場が大きく豊かになるにつれ、日本全体が褒めたたえられ、大きくなっているかのようだった。仕事の幸運と繁栄は、彼の功名心や利益をはるかに超えていた。これは全体との密接で神聖な共同作業であった。工場を造り、物質を変質させているこの私という儂い個人の背後に、民族全体が夜通し働いていると感じている。このことが、工場主の搾取同然の食欲さに、個人の欲求を超えたある種の崇高な神聖さを与える。

私たちはやつと工場の視察を終え、日本人工場主と料理屋に入った。お湯で湿らしたタオルが出され、私たちは、ほこりまみれの顔と手を拭った。非常に小さな鉢で生ぬるい酒を飲み、食事をした。私は少し疲れて無言でいた。これら全ての工場は、ある点までは私には興味深いが、それ以上は私の関心を引かず、疲れさせるものだった。人間が原料を変質させ、自分たちに仕えさせるのを見るのは興味深かった。それらを超えたもの、すなわち、工場主や商人が正に興味を持っていることは、私の内なる好奇心とは合致しない。私の仕事にとって無駄な

負担だと思うので、学ぶとすぐにそれらを忘れようと躍起になる。

ずる賢い工場主は、私の魂のこの不満に気づいたのだろうか？ そんな繊細さは、私には信じがたく思えた。しかしながら、かなりの沈黙の後、デザートに至った時、工場主が溜息をついて言った。

「心の底では、これらすべては私の心を満足させません。一日が終わって事務所を出て早く家に帰れることを願っています。風呂に入り、着物に着替えて、裸足で庭に降ります。草むしりをして、水をやって、花がどんなに成長しているかを観察します。窓辺に座って、月を待ちます。妻は三味線が弾けるので、私の好きな古いハイカイを小声で歌ってくれます。《愛し合おう、山桜よ！ 愛し合おう。私はおまえ以外に誰も知らない》^{十二}

少し沈黙して、私は、この多面的な黄色い工場主の頭の鋭さ、また心の謎めいた予言の力を感嘆しながら見ている。彼の溜息とこれらの言葉が、私を征服するものとも良い手段であることを彼は意識していたであろうか？ しばらくの沈黙の後、彼はにっこりして、盃に酒を満たして言った。

「現代の最も偉大な詩人はアキコです。彼女は、私が最

も好きなハイカイを書きました。《人間が作って、今で何千年にもなる家に、私も一本の金の釘を打ち付ける》^{十三}」
彼は半ば勝ち誇ったように半ばからかうように、笑って付け加えた。

「私は、このハイカイに小さな変更を加え、私の作品にしました《人間が作って、今で何千年にもなる家に、私は緑のキャンドルを灯し、蚊を追いかう》」

大 阪

朝早く汽車の窓から、稲の新芽が出始めた苗代を見ていると、日本の古い歌に心が引き裂かれる。《雨の中、日照りの下、ぬかるんだ水田で腰を曲げ、背を曲げて、農民たちが一日中働いている。領主よ！ 彼らの労働を考えろ！》

だが、領主たち、侍や大名は一八六八年まで農民たちが蒔いた米を刈り取り、戦のことだけを考えていた。ブルンズの兜に桜の小枝を刺して、戦いに赴いた。日本のルネッサンスの後、高慢な侍たちの運命が変わった。彼らはもはや、農民たちに課税せずに国から少額の年金を貰っていた。商売しようとしたが、知識も無く、ずるく

もなかったもので、破産した。それで、政治やら文学やらジャーナリズムやら教育やらに身を投じた。かつての封建領主たちは、今や必要に迫られ、自由主義者や社会主義者にならざるを得なかった。多くの今日の左翼の日本人たちは、侍の子や孫である。しかしながら、不滅で動きの緩慢なこの大地の民である農民たちの運命は変わらなかった。未だに、雨の中、日照りの下、身を屈めて田んぼの泥の中で厳しい労働をしている。そして夜になると、不満を持って歌に詠まれているように、へとへとに疲れ果てて、ぼったりと倒れ込んで眠る。そして、未だ働いている夢を見る。

列車は溢れんばかり。日本人たちは旅をするのが大好きだ。遠くの神社に参拝に行く。春には満開の桜を、秋には菊を、八月には蓮の花を、五月には藤の花を、見にはせ参じる。僅かな荷物しか持って行かない。泊まるホテル、すなわち旅館には、必要なものは何でも備わっている。パジャマ、スリッパ、歯ブラシまで。傍には急須が置かれ、絶えず緑茶が満たされているだろう。

多くの男の人たち、そしてすべての女の人たちは、まだ民族衣装を着ている。寒い時には、風が中に入らないように、着物をしっかりと身にまとう。冬にはこの衣装

はとても不便である。袖は広くて風が入ってくるので、着物が絶えず開いて、太もがむき出しになる。女の人たちは隠された美しさや、あるいは醜さがあらわにならないように、優雅な努力をするが、無駄である。たしかに昨日夜風が吹いた時、林檎のような象牙色の脛が見えた。

日本民族の先祖は恐らく非常に暑い気候の土地、南方のマレー諸島からやって来たのだろう。さもないと日本人の衣装も家も食べ物も説明がつかない。日本の家は鳥かごのようである。木で出来ていて軽くて涼しく、壁の代わりに籐やふすまを使っている。下は畳である。家中ではいつも裸足で歩いている。風が至る処から入ってくるので、身を切るような日本の冬の寒さを、小さな火鉢で和らげようと努めるが、役に立たない。日本人の伝統的な食事はとても暑い気候にのみ相応しい。米や野菜や魚。肉やバターや脂は稀である。恐らく、こんな気候でこんなものを食べているので、日本人は今も背が低くて病弱な感じなのだろう。新しい世代は十分な肉やバターで育ち、アングロサクソンの習慣に倣っているのに既に体が変わっている。より背が高く、よりがっしりしている。

隣り合った人と話をした。愛想の良い、太った、髭を剃りたての中年の男性。裕福な遊び人で柔らかい座布団にどっしりと座って、神戸のゲイシャたちが踊るのを見ながら、生ぬるい酒を飲んで夜を過ごしたように見えた。夫婦間の単調さを抜け出し、一夜寛いだのだろう。日本のことわざが言っている「最も甘美な女性は友達の妻、次がゲイシャ、その次が女中、そして自分の妻」

だまされた。彼は貿易商で英語を少し知っていた。神戸の郊外に別荘を持っていて大阪の事務所に行く途中だった。人口二五〇万の巨大な都市について私に語り、その顔は誇りで輝いていた。

「マンチェスター、いや、東洋のシカゴと言った方がいいでしょう。ほら、大阪の煙突が見えてきました。森ですよ。六千七百の工場があり、世界中に綿製品を送っています。日本の経済的首都です」

そう話している時、目はきらきらと輝いていた。この太ったぎらぎらしている体には不屈のエネルギーが住み着いているように思われる。

太った体に精神がみなぎっているこの光景に人生で度々出会ったことがある。魂がこの太った体にたこの足のようにながら育っているように思える。

その日本人は太い葉巻に火を付けて話を続けた。

「我々は仕事をしています。一日中、電話、電報、数字、貨物の送り状、為替。でも、夜はくつろぎます。日本の都市でこれほど多くのキャバレーやお忍びで楽しめる料理屋があり、これほど奇麗なゲイシャたちがいるところは他にありません。大阪には六千人のゲイシャがいます」

私は脂肪の塊が話すのを聞くのを楽しんだ。彼の太った短い手を称賛の眼で見っていた。その手は非常に器用に儲けたり、愛撫したりすることを知っていた。

「あなたは仏教徒ですか」からかおうとして尋ねた。彼は笑って皮肉っぽく私を見た。

「勿論ですとも。私の仕事が上手くいっている時には、お寺に立ち寄って、ブツダの足元に花を供えることもあります。損はしませんから」

「この世の中は感銘的で美しい、五感で感じる舞台です。目を開いてください、目を覚ましてください。必要性の罫にしがみつくのは止めて下さい」

「はい、分かっています」お調子者の商人が笑いながら答えた。「ブツダもそう言いました。勿論、彼の時代の熱帯林の中の人々にとっては正しかったです。でも、ブツダが今生きていて、そして大阪に住んでいたら、きっと

私みたいだったでしょう」

私は彼を初めて見るかのようにまじまじと見つめた。私はかつて木彫りの仏像を見たことがあった。その像は大きな膨らんだ腹をして、大笑いをしていた。その笑いは口から肉付きの良い顔全体に広がり、二重顎を捉えて三段腹から腰へ、むき出しの太腿まで、そしてやわらかで膨らんだ足の裏まで下りていった。

私をずるそうに、まじまじと見つめているこの貪欲な商人が、朝、風呂に入って、涼しい畳に素っ裸で胡坐をかいて座り湯気を立てていると、妻が何も言わず緑茶を持って来る。そう、その時、彼は心優しいブツダそのもので、茶とか妻とか商売といった、やがて壊れて空中に消え去ってしまうシャボン玉のようなこの虚しい世界を見つめていたに違いない。

彼の内面を垣間見て、矛盾だらけで不可思議な東洋の魂を感じた。大阪のこの太った商人が元気でいるように。彼の商売がうまくいくように！

煙突の森が煙を吐いている巨大な大阪の体中を、たくさん運河が静脈のように循環している。千三百二十の橋があり、袋、木箱、鉄、木材を積んだ数え切れないほ

どのはしけが、黒く澱んだ水を静かに切り裂いていく。黄色い肉体労働者のクーリーは剃った頭に汚れた手拭いを締め、汗は煤と混じり合って裸の体に流れ落ちる。

美しさも優しさもない黒いヴェニスだ。大阪は最も活気のある時期にあり、その時は、まだやって来ていない。しかし数世紀後にはきつとやって来るだろう。過ぎ去った時代の緑青（ろくしょう）が付き、港が少し荒廃して、今日の高層ビルにツタが這い上り、青白い旅行者がやって来てその美しさを楽しむ時が。大阪はまだ荒々しく、貪欲に、せっかちに生きていて、そぞろ歩きの人たちを受け入れない。大阪を見ているとジャングルで生きた虎を見ているかのように思われる。毛皮がどれほど美しいか、体がどれほどしなやかに揺れ動くかを称賛するゆとりも力もない。今日の大阪は野獣なので、噛みつく。ただし、大阪の通りをそぞろ歩く仕事のない人や詩人にだけ。

忍耐と分別を持って夜になるのを待たなければならぬ。夜になると大阪は爪を隠し運河に身を横たえ、日中の狩りで疲れた頭を穏やかにもたげて欠伸をし、海から吹いてくる涼しい風を吸いこむ。虎が休息し、食べたものを消化しているこの時、いろいろな提灯に火が点り、

劇場や、映画館やキャバレーの電飾の光が、水のように降り注ぐ。閉ざされていた戸口が半開きになり、洗ったばかりの爽やかな体がお辞儀をして、あなたを迎える。

辺りが暗くなって工場やオフィスの立ち並ぶ地域の大通りには人けがなくなり、夜の歓楽街の狭い路地は色とりどりの絹の提灯で照らされ、あなたを誘う。貿易商人、工場主、労働者、クーリーたちは体を洗い、髪をとき、着替えをする。昼間は貪欲に働いていた人々が、人間らしい表情を取り戻す。虎は運河の上で一杯になった腹がすっきりするのを感じ、安らかに瞼を半ば閉じる。

いろいろな提灯に火が灯り、女たちの下駄の音が通りに聞こえ、春らしい風が吹く夜、日本は人間の本能に触れ、ビザンツの隠者が神を定義しようと名付けた（穏やかな涙）を保ち続けるのは誰しも困難である。

故郷を遠く離れ、このような異国的な優雅な人たちの中にいるという欲びが私を夢中にさせる。私はあるバーに入った。三人の若いゲイシヤが派手で華やかな着物を着て、ハート形をした黄色い提灯の下に座って、穏やかな笑みを絶えず湛えていた。煙草を吸って待っている。微笑みと手と口で、一日の仕事の疲れを和らげてやろうと、男を待っていた。私が入るや否や、彼女たちは待ち

構えていたかのように立ち上がり、私の腰を掴んだ。私たちはクッションの上に座り、パントマイムが始まった。私は僅かな日本語しか知らなかった。《心、桜の花、ありがとう、太陽、月、いくら？ いいえ、はい》そして、《ゴギソー、サマー》すなわちあなたの料理は美味しいという意味。こんな貧弱な語彙でどのようにしてやっていったらだろうか？ が、帰ろうとして立ち上がった時、これらの言葉は十分であり、有り余ってさえいたことが分かった。

女たちは良かったし《ゴギソー、サマー》派手な明かりも良かった。だが、朝目覚めた時、心の奥深くにある苦いものが一滴留まっていた。まっすぐな道を踏み外したかのように、最も直接的で、最も同時代的な義務を裏切ったかのような。健全な人間は甘美さそのものに身をゆだねるなんて有り得ないし、ゆだねるべきではない、そういう時代に我々は生きている。

着物や提灯の後ろに怒りや絶望の音が聞こえる。希望のない日雇い仕事や、空腹や心配事で歪められた無数の人々の群れが厳しくおまえを見つめている。先日神戸で自分の工場を得意気に案内してくれた抜け目のない工場

主のことを思い出した。倉庫に入った。そこでは大勢の女たちが老いも若きも昼夜分かたず、十二時間、十四時間と腰を曲げて働いている。私は彼の方を向いて尋ねた。

「日当は一人いくらですか？」

彼は聞こえないふりをして話題を変えた。しかし私は彼を逃さなかった。

「日当は一人いくらですか？」

彼は恥じ入っているかのように、声を落として答えた。

「五十銭……（十五ドラクマ）」

「いくら？」

「五十銭……」

ゾツとした。工場全体が血を浴びているかのように思われた。日本の女工たちに関して最近公表された正式な医療報告を思い出した。《紡績工場で働く人の八〇％は女性である。昼夜を分かたず一日十四時間から十六時間働いている。彼女たちの健康は急激に蝕まれていき、最初の週から体重を減らしていく。とりわけ夜勤が彼女らを破滅させる。誰も一年以上は堪えることが出来ない。死ぬ者もいれば、病気になって去っていく者もいる。何千もの人たちはもう家には戻らない。工場から工場へと走ったり、赤線地区に身を落したりする。ほとんどの人

たちが病気にかかる。結核などの……」

朝の光の中で大阪を見つめる。人食いドラゴンを目を
覚まして空腹であるかのように煙を吐きベルを鳴らして
いる。何世紀か後には、大阪、マンチェスター、シカゴ、
ニューヨークといったこれらすべての都市はずっと後の
世代の人々には、神話に出て来る人を喰う怪物のように
思えるだろう。

物質を支配する人間の力は驚嘆すべきものである。し
かし、工業によるこの征服は人間の精神の進歩とは足並
みをそろえない。お互いに敵でさえあるかも知れない。
こんなにも完全武装した敵たちの間で日本に残された唯
一の取るべき道は工業化だった。このやむを得ない道を
取るや否や、その他の全ての事が当然の結果としてやつ
て来た。搾取、不正、病気、物質の過剰使用、精神的な
鍛錬の欠乏等が。最後の結果すなわち社会的な革命の期
が熟して、その赤い花を咲かせるまで。

今日は一日中工場を回った。耳は騒音で一杯になり、
目は機械や黙って働いている娘たちで一杯になった。私
の手帳は数字で一杯になった。一日中質問をして書きこ
み、そしてまた質問をした。私は知っている。質問は何
の役にも立たないということ、数字は夢のように変幻自

在で、したたかな頭脳を持った人は数字を無限に組み合
わせて、自分の求める結果を導き出すことが出来るとい
うことを。もし私が日本人の女工であったなら、筆を取
って、髪に挿している白い櫛に太い黒い字で辛辣なハイ
カイを書いたことだろう。《そのとおり、数字は言ってい
る、嗚呼、私が幸せだと。けれども私は日ごとに青ざめ
るばかり。そして今日咳き込み始めた》

「女工は日当として五十銭から一円貰うと言われました
ね。こんな乏しい日当でどうやって生活できるのです
か？」

私は抜け目のない技師と、工場の事務所に座ってお茶
を飲んでいいる。その技師は自分が管理している地獄を全
て案内してくれた。彼は慌てることもなく、平然と煙草
に火を付けた。自分の勝利を確信していた。

彼はねっとりとした声で話し始めた。

「あなた方も全てのヨーロッパ人たちと同じように、条
件の位置をずらして手早く結果を出します。しかし、も
し日本が正しく評価されることをお望みならば、日本の
現実を考えておかなければなりません。イギリス人の労
働者は、週に二ポンド受け取ります。この二ポンドで生
活していくのは困難です。日常生活にはとてもお金がか

かります。衣類、靴、家、家具、食料等、全てが非常に高価です。食事を例に取って比較してみてください。イギリス人は肉、バター、ミルクや缶詰を食べる習慣があります。そうでないと生きていけません。日本人は生まれつきや習慣によつてつつましい食事をします。野菜、魚、米などを食べて幸せでいます。日本の生活はヨーロッパやアメリカとは比較にならないほど安いのです。一円の貨幣価値はいくらかご存知ですか？ あなたは一時的にホテルに滞在して、自分一人では買物に行かないので、分からないのです。一円で買えるものは、米一キロ、イワシ一箱、魚五百グラム、卵三個そしてバナナ五本かな？ それだから、私たちが支給している日当ではイギリス人の労働者は飢え死にするでしょうが、日本人は生活出来ます、それも豊かに。

それから、我々の家がどんなに簡素かご存知ですか。木や籐の間仕切り、僅かな畳と敷物一枚。家具もなければ、余分な安っぽい飾りもない、上品な簡素さです。私たちの生産意欲は旺盛なのに、嗜好は質素で、生活にはお金がかからず、必要なものは僅かです。このように、我々は僅かな日当を与えて、二つの素晴らしい成果を手に入れました。すなわち、労働者の単純な要求を満たす

と同時に、工業製品をとて安く上げること的成功して「います」

「何を考えているのですか？」私が黙っているのを見て、技師は私に尋ねた。

「危険性を考えています。大きな危険があると見ています。もし全ての国があなた方に対して市場を閉鎖したら、あなた方はどうなるのでしょうか？」

「全ての門戸が私たちに対して閉じられることは、ありえませんが。大きな門戸が開かれたままであることを、いつも期待しています。それは中国です。中国だけで十分です。五億の顧客が……。そのような困難な瞬間がやって来るまで、そんなことになるとは思わないで我々は働きます。働いている二人の言い分をご存知ですか？ 一人は『私はまるで不死身であるかのように働いています』と、もう一人は『私は今この瞬間に死ぬかのように働いています』と。私たちは最初の人のやり方に従います。それから、忘れないで下さい。日本人の労働者は機械に夢中になります。機械の事であれば何にでも興味を持ち、熱中します。白人たちに遅れを取らないように、追い越すようにという意欲に突き動かされます。信念を持って働いています。個人的な意欲？ 国粹主義？ 最近

啓蒙を受けた狂信？ どのように言われても結構ですが、彼らは十二時間、十四時間と、疲れることなく信念を持って働いています……」

「そして、あなたは勿論、利益を得ます……」

技師は大笑いした。

「一体、私たちにどうしろと？ 熱心さにブレーキを掛けるというのですか？ 我々は利益を得ています。我々は企業家であり商人でもあります。隠者でも博愛主義者でもありません。それぞれの社会階級にはその法があります。もしも他の階級から法を侵害されたり、変えられたりしたら残念なことです。もし虎に草を与えたら、死ぬでしょう。もし羊に肉を与えたら、死ぬでしょう……」

「しかし、全ての階級に対しての全人類に共通する法があります……」

「当然です。私たちはそれを守っています。労働者たちに注意を払っています。彼らがよく眠り、体を洗い、体を鍛え、強健になるように気を配っています」

「……そして、彼らがよりよく働き、もっと多くの利益を上げることが出来るように……」

太った喉がまた笑った。

「当然です。このようにして倫理と利益を結び合わせま

す。これ以上完璧な結びつきが有るでしょうか？」

もし私が裕福な日本人の企業家であったなら、筆を取って絹の紙に赤い字で次のようなハイカイを書いたであろう。《叡智の最高の果実は何であろうか？ 自分がパイを独占しておきながら、犬が自分の手を舐めてくれるほど満腹している、と感ずること》

やっと工場を出てきれいな空気を吸った時、日本人の同行者の方を見て言った。

「オーザカ（大阪）には私の目の保養になるような、彫像や中世の城や花盛りの庭園はないのだろうか？ 私の心は、猛り狂い始めている」

「機械や数字に疲れたのですか？」

「あの人の機械や数字に対する信念が私を疲れさせました。いや、知っているのですよ。世界がアメリカ化する。これは、機械文明が消滅するまでに通過しなければならぬ、最も悲しむべき、避けがたい段階の一つであるということ。その車輪があなたを捉えました」

「それは正しくありません。もし、あなたがわずかな忍耐ともつと沢山の愛を持っていたら、技師が私たちに話してくれた《ロボット》を、あなたが彫像や、城や花盛りの庭園を見るであろうと同じような歓びと安らぎを持

って見たことでしょうか。この機械人間は、あなたが愛する芸術作品と同じように、辛い、悲劇的な、絶え間のない活動の成果です」

私は答えた。

「はい、分かりますよ。人間の歴史が常にどれ程悲劇的であるか。でも忘れたいと思うことがよくあります。そうしないと笑う力をどうやって見付けられたでしょう。もし笑わないでいたらどうして人生劇場に堪えることが出来たでしょう」

こんな風に話していた時、突然、川に取り囲まれ、がちり組み合わされた御影石の石垣の上に非常に野性的な城が現れた。人間の建造した建物でこのような厳格さと雄大さで力と頑固さを表現しているものはめつたに見たことが無い。七つの層はバネのように押し付けられ、屋根は大火事によって巻き上げられているかのようになり、上に向かって力強く建てられている。パルテノン神殿の均整の取れた力強いまっすぐな線はここにはない。打ち上げられて空に消えていくゴシック建築の先端もない。波打つように少し反り上がった線、解き放たれて突進しようとする願望、均整を打ち破ったがまだ跳びかかっている力。虎が獲物に襲い掛かろうと身を縮めて、神経

を集中し、威嚇している瞬間であった。

「これは偉大な人物の鞘だ。誰が建造したのですか？」と私は叫んだ。

「これは確かに偉大な人物の鞘です。偉大な日本のナポレオン、ヒデオーヒ（秀吉）の」

「ヒデオーヒの？」と恥ずかしさで赤くなって尋ねた。その名を聞くのは初めてだった。

「私たちの歴史の中で最も偉大で有名な軍の指揮官です。背が低く、色黒で、怪物のように醜く『サルメンカンヤ』（猿面冠者）と呼ばれていた猿王侯です。一五三六年に田舎の身分の低い家柄に生まれました。彼の生命力は肉体的にも、精神的にも、信じがたいものでした。すさまじい好色漢で、驚く程放蕩の夜を過ごしていました。しかし同時に、素早く冷静な頭脳と戦鬪的に非凡な才能を持ち、朝鮮と中国を征服して、広大な皇国を建設しようという巨大な野心を持っていました。秀吉は『中国と日本と朝鮮の三国を一つにしよう。敷物を丸めて脇で抱えるほど簡単にやっつてのけよう』と言っていました。

秀吉は同時に偉大な改革者であり行政や公共の経済と農業、商業の刷新を行い、初めて日本の港に碇を下ろしたイエズス会の修道士達やヨーロッパ人たちを保護しま

した。そして、機械や鉄砲や、白い鬼どもの内で役に立つと見られるものは何でも取り入れました。

この恐るべき、多面的な人は母を愛し、また畏れていました。そしてとても優しい父親でもありました。朝鮮通信使が秀吉の御殿での謁見の後に送った報告書が残っています。《秀吉は背が低く、色黒で俗悪な容姿をしています。だが彼の目には、人を燃やすような火花が散っていました。正式な黒っぽい羽織を着て、三枚の座布団の上に、南を向いて座っていた。突然、御簾の内に入り、しばらくすると私たちの前に普段着で現れ、腕に赤ん坊を抱いていた。謁見の間を行ったり来たりしていたが人々は皆ひれ伏して崇めていた。そうこうしている時に赤ん坊が粗相をした。秀吉は家老にその子を連れて行って着替えをさせるように合図をした。謁見の間に一人居るかうに振る舞っていた》

朝鮮人たちはこの英雄のことをこんな風に物語っていました。その続きには秀吉が彼らに与えた返答が以下のように述べられています。《私は国を平和にした。私は貧しい家柄の出身だが、私がまだ母の胎内にいた時、母は太陽を生む夢を見た。その時ある陰陽師が彼女に言った。『この子は日輪が輝くところ、あまねく君臨統治するで

あろう』私は大軍を招集して中国を踏み潰そう。そして私の剣の雫は四百の地方の上に降り注ぐだろう》

この偉大な野心を実現したでしょう、もし死が彼を打ち倒していなければ。秀吉のあらゆる夢は霧散しました。最愛の息子のヒデヒョーリ(秀頼)は殺され、他の一族が覇権を握りました。秀吉が臨終の床で書いたこの句を読む時、鳥肌が立つでしょう。自分の運命をとて悲劇的に預言的に見えています。《露のように私は落ち、露のように消えてゆく。大坂の城さえも、夢のまた夢でしかない！

十四》

【註】

一 カザンザキスの日本・中国旅行は一九三五年。本訳は Νίκου Καζαντζάκη, Ταξιδεύοντας Ιαπωνία - Κίνα, Αθήνα 1969, Εκδόσεις Ελ. Καζαντζάκη を底本とし、その中の「神戸」「大阪」の項を翻訳したものである。

二 アメリカ街(旧)神戸外国人居留地。アメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスとの条約に基づき、一八六八年一月一日から一八九九年七月十六日までの間、神戸村(後の神戸市中央区)に設けられ、一定の治外法権が認められた。小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)は一八九四年から一八九六年までこの居留地で新聞記者として活躍した。

三「ああ、忠実なクズノキがここに横たわっている」…南北朝時代の武将・楠正成（一二九四—一三三六）を祀る湊川神社の石碑に彫られた碑文（嗚呼忠臣楠子之墓）による。一六九二年に水戸光圀が建立。

四 アデルフィー…ギリシア語で「姉妹」のこと。

五 マヤ・サン（摩耶山）…六甲山系の一つ。摩耶山の名は空海が山頂の天上寺（六四六年開創）に釈迦の聖母・摩耶夫人（まやぶにん）像を安置したことに由来する。

六「他人の前では微笑んでおれ……」…催後渠（明時代末の政治家、学者）の言葉『六然訓』で、勝海舟は感銘を受け、書にも残している。《『自処超然』（じしよちようぜん）『処人藹然』（しよじんあいぜん）『有事斬然』（ゆうじざんぜん）『無事澄然』（ぶじちようぜん）『得意澹然』（とくいいたいぜん）『失意泰然』（しついたいぜん）》

七 モガ…「モダンガール」の略。一九二〇年代（大正末期から昭和初期頃）に、西洋文化の影響を受けて、新しい風俗が流行した。それを取り入れた先端的な若い女性を言う。

八 チンチン電車…神戸市の路面電車一九一〇年に開業。先進的な技術を導入し、女子車掌を採用するなど、革新的であった。「東洋一の市電」と称された。「チンチン電車」という愛称は、人や車が前方を横断しようとしている時に、電車の運転手が警笛を「チンチン」鳴らしたことに由来する。

九 個性を失くし…仏教の「無我」《我（われ）という囚われを

離れること。また、不変の実体である我（が）は存在しないとすること》を指すと思われる。

十 宇宙の中に消滅すること…仏教の「解脱」「涅槃」《全ての煩惱から解放され、輪廻転生の迷いの苦悩から解放され、真の自由の境地に達すること》を指すと思われる。

十一「王であれ田舎者であれ、運命の女神がおまえをどこに置こうとも、自分を使い切れ」…明治天皇御製《もろともに たすけ交わして むつびあふ 友ぞ世に立つ 力なるべき》のことか？

十二「愛し合おう、山桜よ！ 愛し合おう。私はおまえ以外に誰も知らない」…金葉和歌集（十二世紀）にある前大僧正行尊の和歌。
《もろともに あはれと思へ 山桜 花より外に 知る人もなし》

十三「人間が作って、今で何千年にもなる家に、私も一本の金の釘を打ち付ける」…アキコ…・与謝野晶子（一八七八—一九四二年。歌人・作家・思想家）
《劫初より つくり営む 殿堂に 我も黄金の 釘一つ打つ》

十四「露のごとく私は落ち、露のように消えてゆく。大坂の城さえも、夢のまた夢でしかない！」…豊臣秀吉の辞世の句
《つゆとをち つゆときへにし わかみかな なにわの事も ゆめの又ゆめ》

（協力…現代ギリシア語教室エリニカ有志）